二〇二三年度 札幌大谷大学短期大学部 保育科 一般選抜日期

国語総合

注意事項

1 試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2 問題冊子は9ページあります。

3 試験中に印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて試験監督者に知らせてください。

問題一　次の文章を読んで後の問に答えなさい（設問の都合で原文を一部省略・改変した箇所がある）。

これまで、ことばと①アイデンティティの関係は、あらかじめ話し手には自分のアイデンティティがあって、そのアイデンティティが言葉づかいにも自然にあらわれると理解されていた。謙虚な人はていねいな言葉づかいをし、ァゴウマンな人はおうへいな言葉づかいをする。ある人がていねいな言葉づかいをするのは、その人が謙虚な人だからだと考えられた。（　A　）、「私たちは、すでにあるアイデンティティにもとづいて人との関わり方を決めている」と考えられていたのだ。

このように、アイデンティティをその人にあらかじめ備わっている属性のようにとらえて、人はそれぞれの属性にもとづいてコミュニケーションをするという考え方を「本質主義」と呼ぶ。

たとえば、アイデンティティのうちで「ジェンダー」（女らしさや男らしさ）に関わる側面を本質主義にもとづいて表現すると、人は〈女らしさ〉や〈男らしさ〉を「持っていて」、その〈女らしさ〉や〈男らしさ〉にもとづいて、ことばを使うと理解される。ある人が女らしい言葉づかいをするのは、その人が女らしいからで、男らしい言葉づかいをするのは、その人が男らしいからだと言われた（ちなみに、本書では、「性別」ではなく「ジェンダー」を用いる。性別とは生物学的な性の違いを指し、ジェンダーは、社会文化的な女らしさや男らしさを指す）。

しかし、このような考え方では説明のつかないことがたくさん出てきてしまった。もっとも大きな問題は、私たちはだれでも、それぞれの状況に応じてさまざまに異なる言葉づかいをしていることがはっきりしてきた点である。同じ人でも、家庭での言葉づかいと学校での言葉づかいは異なる。同じ学校で話していても、話す相手や、場所、目的によって異なる。さらに、同じ人でも子どもの時と大人になってからでは言葉づかいが変わる。同じ〈男らしさ〉を持っている人でも、その言葉づかいはそれぞれに異なる。むしろ、いつでも、だれとでも、同じ言葉づかいで話している方が不自然に感じられるのではないだろうか。（　B　）、私たちが、すでにあるアイデンティティにもとづいて人との関わり方を決めているのだとしたら、このように言葉づかいが多様に変化することを説明できない。

そこで提案されたのが、アイデンティティをコミュニケーションの原因ではなく結果ととらえる考え方である。私たちは、②あらかじめ備わっている〈日本人・男・中学生〉という属性にもとづいて言葉を選んでいるのではなく、人とのコミュニケーションによって、自分のアイデンティティをつくり上げている。「私は日本人だ」「男として恥ずかしい」「もう中学生になった」などと言う行為が、その人をその時〈日本人〉〈男〉〈中学生〉として表現すると考えるのである。

③アイデンティティを、その人が「持っている」属性とみなすのではなく、人と関わり合うことでつくりあげる、つまり、「アイデンティティする」行為の結果だとみなすのである。このように、アイデンティティを、他の人とことばを使って関わり合うことでつくり続けるものだとみなす考え方を「構築主義」と呼ぶ。

構築主義によれば、人はあらかじめ「持っている」アイデンティティを表現しているのではなく、他の人と関わり合う中で、その時々に応じて、さまざまなアイデンティティを持った人間として立ち現れるのだ。本書では、構築主義の考え方にもとづいて、ことばとアイデンティティの関係を見ていく。

「構築主義」という考え方のィトクチョウは、何よりも、私たちのアイデンティティは、他の人との関わり合いの中で表現されるものだと考える点だ。関わり合う相手は、人間でなくてもよい。ペットに話しかけるときには、自分でもびっくりするぐらい優しい自分になっている時がある。

しかし、ここまで読んできて、いくつかの疑問を持った読者がいると思う。

まず考えられる疑問は、他の人と関わり合うことで、その時々に応じてアイデンティティを表現するとしたら、人と関わり合う前の自分は空っぽなのかという問いだ。この、「自分は空っぽ」というのは、たいていの人の感覚とずれている。むしろ私たちは、自分の中には何か自分らしさがあるという感覚を持っているのではないか。

これに対して、構築主義を提案した人たちは、次のように説明する。私たちは、繰り返し習慣的に特定のアイデンティティを表現し続けることで、④そのアイデンティティが自分の「核」であるかのような幻想を持つ。

そう言われてみると、私たちが日常的に関わり合う人たちは、結構、似たような人であることが多い。毎日、新しい出会いがある人もいるかもしれないが、たいていは、家族やクラスメート、学校の先生など、同じような顔触れなのではないだろうか。だとすると、私たちは、日常生活で関わる人に対して、かなり長い期間、繰り返し、同じような自分を表現していることになる。そして、それが「自分らしさ」を形成していると感じるようになっているとしても、不思議ではない。

哲学者のジュディス・バトラーは、ジェンダーに関わるアイデンティティについて、「ジェンダーとは、身体をくりかえし様式化していくことであり、きわめて厳密な規制的枠組みのなかでくりかえされる一連の行為であって、その行為は、長い年月のあいだに凝固して、実体とか自然な存在という見せかけを生み出していく」と指摘している（バトラー一九九九）。

つまり、女らしさや男らしさに関わるアイデンティティの側面も、身近な人との関わり合いの中で、長い間繰り返し表現していくことで、「自分の女らしさ、あるいは、男らしさはこんな感じ」という感覚がゥカクリツしていくというのだ。

もうひとつ考えられる疑問は、私たちは、その時々に応じて、さまざまなアイデンティティを持った人間として立ち現れるとしたら、自分のアイデンティティは複数あるのかという問いだ。これは、「アイデンティティ」をどのように理解するかという難しい問題をはらんでいる。しかし、⑤アイデンティティをひとつに限る必要はないと考える人はいる。

（　C　）、作家の平野啓一郎は、『私とは何か』（二〇一二）の中で、「個人」ではなく「分人」という考え方を提案している。この本によると、たったひとつの「本当の自分」など存在しない。むしろ、対人関係ごとに見せる複数の顔が、すべて「本当の自分」である。

「分人」という考え方の素晴らしいところは、たとえ、Aさんとの関係で見せている自分は好きではなくても、Bさんとの関係で見せている自分を支えにしていけると示している点だ。学校でいじめられて苦しんでいる自分がすべてではなく、家に帰って家族から愛されている自分を認めることで生きていける。

このように、複数のアイデンティティを表現することは、後期近代のトクチョウだという人もいる（注1）ギデンズ二〇〇五）。そう言われてみると、以前の日本企業は、エ シュウシン雇用が売りだった。一度就職すれば、退職するまで同じ会社で働く。自分のアイデンティティは、オ ショウシンなどで変わるぐらいで、基本的には、会社の限られた人間関係にもとづいていた。へたをすると、「会社」が、その人のアイデンティティになる場合も多かった。

（　D　）今は、ひとつの会社に就職しても、転職する人もいる。同じ会社で働く人も、正社員から派遣社員、嘱託やアルバイト、それに加えて転職組など、あらゆる立場の人たちが一緒だ。会社の上下関係だけにもとづいて接していては、仕事が動かない。それぞれの立場の人が、他の立場の人と、アイデンティティを調整しながら関係を築いていかなければならない。現代人が生きる人間関係はより複雑になり、結果として、場面ごとに異なる複数のアイデンティティを生きる必要が発生したのだ。

（注1）アンソニー・ギデンズ＝イギリスの社会学者、社会理論家。

（中村桃子『「自分らしさ」と日本語』ちくまプリマー新書）

問一　傍線部ア～オのカタカナを漢字に改めなさい。

問二　（　Ａ　）～（　Ｄ　）に入る適当な語句を次から選び、記号で答えなさい。同じ記号は二回使用できないものとします。

ア　ところが　　イ　むしろ　　ウ　つまり　　エ　たとえば　　オ　もし　　カ　たとえ

問三　傍線部①「アイデンティティ」の辞書的な意味として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　自己相反性　　イ　自己同一性　　ウ　自他解離性　　エ　自他近接性　　オ　自己対照性

問四　傍線部②「あらかじめ備わっている〈日本人・男・中学生〉という属性にもとづいて言葉を選んでいるのではなく」とあるが、その理由について、本文中の言葉をもとにして四〇字～五〇字で説明しなさい。

問五　傍線部③「アイデンティティを、その人が「持っている」属性とみなす」考え方を指す語を、本文中から六字以内で抜き出して答えなさい。

問六　傍線部④「そのアイデンティティが自分の「核」であるかのような幻想を持つ」とあるが、「幻想」という表現が使われているのはどうしてか。その理由について説明した文として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　アイデンティティというものは、現実の生活とは関係の薄い、ファンタジー世界にしか存在していないから。
イ　自分はこういう人間であるというアイデンティティは、現実離れした夢を追いかけることで形成されていくから。
ウ　自分が考える自分らしさは、コミュニケーションの反復によって確かなものだと信じられているにすぎないから。
エ　同じような自分を表現していくうちに、自分でも気づかなかった自分こそが「本当の自分」だとわかることがあるから。
オ　自分の「核」とは何かを掘り下げることで、幻想世界に理想化された自分を見出し、同一化することができるから。

問七　傍線部⑤「アイデンティティをひとつに限る必要はない」とあるが、その理由について、本文中の具体例を一つ取り上げて、七〇字以内で説明しなさい。

問八　次の１～５の内容が本文の内容と合致する場合には○を、合致しない場合には×をつけなさい。

１　発話する人の気質や性別によって多様なことばが使われることは自然であり、結果的に複数のアイデンティティが形成される。

２　発話する状況や相手によって複数の顔が使い分けられることは自然であり、場面ごとに多様なアイデンティティが形成される。

３　人は他人と関わりを持つとき、もともと備わっている自分の特質に応じてコミュニケーションの仕方を決める。

４　人は他人と関わりを持つとき、多様なコミュニケーションを使い分け、複数のアイデンティティを表現している。

５　人は他人と関わりを持つとき、「本当の自分」ともくり返し対話を行い、そこから最適のコミュニケーションを選んでいる。

問題二　次の文章を読んで後の問に答えなさい（設問の都合で原文を一部省略・改変した箇所がある）。

チンパンジーは残念ながら、ことばをしゃべることはできない。アメリカの心理学者ヘイズ夫妻をはじめ、チンパンジーのあかんぼうをわが子同様に育て、ことばを覚えさせようと努力した試みは、すべて失敗に終った。フォークやナイフを使っての食事やマナーはすぐ覚えたのに、ことばだけは、ママ、パパ、カップ、アップの四語をかろうじて話せるようになっただけで、他は全く学習することができなかった。同じような試みが幾人かによってなされた結果、チンパンジーには言語能力がない、というのが学界の定説になった。

ところが、世の中には①コロンブスの卵のような発明をするすばらしい才能の人もいるわけで、②この定説を打ち破る研究がでてきた。アメリカの若い心理学者ガードナー夫妻である。彼らがチンパンジーに手話を教えたところ、どんどん覚え、三年後には一五〇の単語を学習し、簡単な会話ができるようになった。

言語はことばだけではなく、身振り言語、いわゆるボディー・ランゲージがある。手話はその一つであるが、チンパンジーはことばは覚えられないけれども、身振り言語の方は、かなり学習する能力があるということなのだ。

ことばは聴覚性言語だが、手振りは【A】性言語である。【A】性言語としては、その他に図形語がある。図形語の表記には彩片語（さいへんご）と図形文字が使われている。彩片語とは、色のついたプラスチックをいろんな形に切り取り、それに意味を与えたものである。霊長類研究所の心理部門で使っているのは、九つの要素図形を定め、その組み合わせで物体名や色名を表わし、その他、数は数字で、名前はアルファベットで表わした図形文字である。

③この分野の研究については数冊の類書が出版されているので省略するが、むしろ面白いのは彼らの学習態度に関するエピソードである。以下は、チンパンジーの言語習得の研究をしている霊長類研究所の松沢哲郎さんに聞いた話である。

チンパンジーは、毎日午前一〇時から勉強を始める。彼らが子どものときは、飼育舎の檻から出してもらい、係の人に手を引っぱってもらって勉強室（実験室）に行っていた。④チンパンジーは勉強時間が来ると、落ち着かない。そわそわして動きまわり、ときには興奮して檻の中を走りまわったりする。この行動も、先のキャスター風に言えば、「勉強をいやがってるのでしょうね」という解釈になるのだろうが、事実は全く逆である。チンパンジーは勉強が面白くて、早く勉強室に行きたくて仕方がないのである。子どもが楽しい遠足や旅行に出る前のいそいそした気持、それと同じことなのだ。

⑤動物は高等になるほど、大脳新皮質が発達する。それが極度に発達したのが人間であるが、サル類、とくに類人猿になると、他の動物に比べて格段の発達をみせる。大脳新皮質がァカクトクしたトクチョウは、自発的な知的活動である。一般の動物は、自分の生活に直接関係ある物や事柄にのみ関心を向ける。ただ生きていくというだけならば、それで十分である。知的関心のトクチョウは、生活に直接関係のない物や事柄に関

心を持つということだ。⑥チンパンジーにとって、勉強は生命を維持する活動にはなんら関係のないことだ。では、どうしていそいそと勉強に出かけるのか。

実験室のガラスの向こうに、赤い鉛筆が三本置かれる。チンパンジーはそれを見て、前にあるキーボードと称される図形文字を表示したセット台に向かい、鉛筆、赤、三というボタンを押す。正解だとホロホロと音がして、好物の干ブドウが三個、横の皿に出てくる。間違うとブーとブザーが鳴り、何もほうびは与えられない。

勉強に行くのは、好物の干ブドウがほしいからだろうというのが常識的な解釈である。たしかに初めはそうなのだが、しだいに状況が変ってくる。彼らは問題を解くこと自体に興味を示すようになってくるのだ。そうなると、問題を解いたとき、もはや干ブドウが出てこなくてもよい。ホロホロという「合ってるよ」を示す音だけで十分なのだ。あるいは、実験者が顔を見せてにっこり笑う、といったことで満足する。

チンパンジーには、新しい知的な世界が開けたのだ。野生の世界では、図形文字を読むといった高度な知的活動は開発されない。チンパンジーは教育を受けることにより、潜在していた知的能力を掘り起こされ、新しい知的活動のィリョウイキが開かれた。彼らはその中で知的なよろこびに浸る、という楽しさを発見したのである。

⑦勉強の仕方について、松沢さんは面白いことを言っている。どういうときにチンパンジーは一番勉強に熱中するかということだが、やさしい問題を続けて出すと、チンパンジーは飽きてしまって、自分の体を毛づくろいしたり、他の物をいじくったりしてあそびはじめる。一方、難しい問題が続くと、初めは一生懸命に取っ組むが、間違いが続くとしだいに腹を立て、いらいらしだし、そのうち勉強室の中をいきなり走りまわったり、ゥ拳で壁を叩いたりする。攻撃性が湧出（ゆうしゅつ）し、問題を解こうという意欲を押しつぶし、ェランボウな行動に出るようになる。

では、彼らが一番勉強に熱中するのはどういう場面かというと、現在持っている能力レベルより少し難しい問題を出したときである。そうすると、チンパンジーは大変熱心にキーボードに向かい、問題を解くために努力する。これは大変興味のあることで、チンパンジーは干ブドウがほしくて勉強しているのではないことを示している。干ブドウにつられて勉強しているのならば、やさしい問題が続いて出される場合が一番いいわけで、キーボードを押しては干ブドウをどんどん手に入れることができるはずである。やはり、問題を解く楽しさが、チンパンジーを勉強に向かわせているということなのだ。

チンパンジーの言語学習の実験は、「学ぶ」という行為について多くの貴重な示唆を与えてくれる。最も大切なことは、大脳新皮質が高度に発達した人間は、放っておいても自発的な知的関心を持つ動物だということだ。だから、本来は子どもたちは勉強が好きなはずなのだ。それが勉強嫌いになったというのは、教育方法に何か大きな欠陥があるということに他ならない。

人間は高度に自由を欲する動物である。自由を求める心は、内的な自発性・自律性の発現が基礎となっている。それを強制的に拘束され抑圧

されると、強い反発力が現われる。現在の子どもたちは、管理された画一的な教育体制に組み込まれることによって、本来持っている知的自発性が阻害され、その結果⑧勉強嫌いという事態が起こっているといえよう。

楽しみながら学ぼう、という合言葉のもとに教育を進める試みがなされつつある。そのこと自体は大変いいことに違いないが、その場合、【B】開発とそれによる【B】快楽という大切な基本をしっかり織りこんでいなければならない。やさしい問題を反復して与えれば気楽にのびやかにやれるかも知れないが、向上がないし集中心を失わせる。運動の場合でも、筋肉への負担が軽いことをいくらやっても筋肉が鍛えられないのと同じことだ。

逆に難しい問題を強制的に連続して与えると、いやになり攻撃性があらわになってくる。現在の日本の学校教育は、このォ弊害に陥っているのではないだろうか。英語でも瑣末（さまつ）な文法や難文の解読といった、実際の人間どうしのコミュニケーションにはほとんど関係のない問題ばかりやらされ、歴史や地理では人間の営みの面白さはそっちのけにして、事件や産物の名称や量、年代といったものの記憶中心の授業が続けば、いやになるのが当然のことだろう。

持っている能力より少し難しい問題に取り組み、それを解くことによって知的なよろこびを感じる、というチンパンジーが学習する際見せた態度は、学ぶことの基本を示しているように思う。それは高跳びの練習と同じだ。いきなりハードルを二〇センチもあげれば跳ぶ意欲が減少するが、一センチ、二センチと小きざみにあげていけば、挑戦の意欲がわき、ハードルを超えることができる。少しずつ高みに登り、そのときのよろこびを持続させることが大切であろう。

（河合雅雄　『子どもと自然』岩波新書）

問一　傍線部ア～オの、漢字には読みを付け、カタカナは漢字に改めなさい。

問二　傍線部①「コロンブスの卵のような発明」とあるが、どのような発見があったことを「発明」と述べているか。本文中から四八字で抜き出して答えなさい。

問三　傍線部②「この定説」とはどのような内容か。本文中の言葉をもとにして二〇字以内で説明しなさい。

問四　本文をよく読み【A】に入る言葉を漢字二字で答えなさい。

問五　傍線部③「この分野の研究」とはどのような内容の研究か。本文を読んで二〇字以内で説明しなさい。

問六 傍線部④「チンパンジーは勉強時間が来ると、落ち着かない」とあるが、その理由を本文中の言葉をもとにして説明しなさい。

問七 傍線部⑤「動物は高等になれば大脳新皮質が発達する」とあるが、類人猿と他の動物の発達の違いを本文中の言葉をもとにして六十五字以内で説明しなさい。

問八 傍線部⑥「チンパンジーにとって、勉強は生命を維持する活動にはなんら関係ないことだ」とあるが、なぜチンパンジーは勉強するようになったのか。本文中の言葉をもとにして七〇字以内でその理由を説明しなさい。

問九 傍線部⑦「勉強の仕方について、松沢さんは面白いことを言っている。どういうときにチンパンジーは一番勉強に熱中するか」とあるが、チンパンジーが一番勉強するのはどんなときか。本文中から二七字で抜き出して答えなさい。

問一〇 傍線部⑧「勉強嫌いという事態が起こっている」とあるが、筆者はどのような教育方法によってそのようになってしまうと述べている か。「やさしい問題」「難しい問題」という言葉を使って四〇字以内で説明しなさい。

問一一 【B】に入る言葉を本文中から探し漢字二字で答えなさい。